

今週の為替相場見通し(2022年7月25日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		135.58 ~ 138.88	136.08	135.00 ~ 138.50
ユーロ	(ドル)		1.0080 ~ 1.0279	1.0214	1.0050 ~ 1.0300
(1ユーロ=)	(円)		138.79 ~ 142.31	138.92	136.50 ~ 142.50
英ポンド	(ドル)		1.1864 ~ 1.2064	1.2010	1.1850 ~ 1.2050
(1英ポンド=)	(円)	*	163.01 ~ 166.25	163.44	162.00 ~ 166.50
豪ドル	(ドル)		0.6792 ~ 0.6976	0.6925	0.6870 ~ 0.7020
(1豪ドル=)	(円)	*	93.94 ~ 95.76	94.26	93.40 ~ 94.90

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 多川 昇吾

(1)今週の予想レンジ: 135.00 ~ 138.50 円

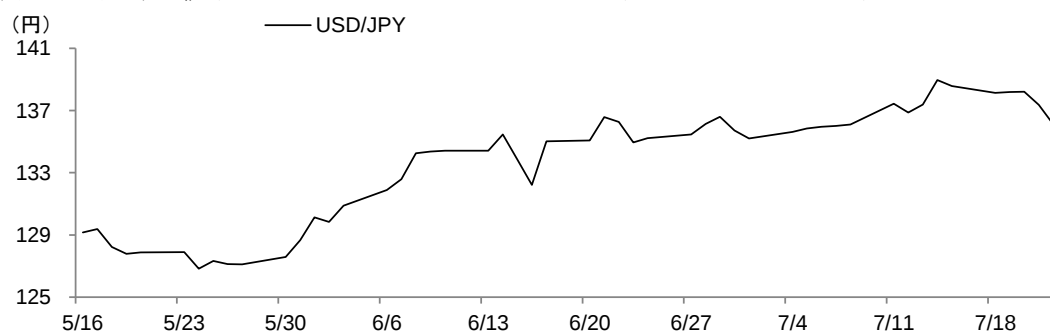
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は週後半に急落した。週初、138.30円付近でオープンしたドル/円は、27日開催予定のFOMCで+100bpsの大幅利上げ期待が後退したことで137円台後半まで値を下げ、上値重く推移した。19日、ドル/円はFOMCを控えたポジション調整の動きから軟調地合いが継続し、米国時間にかけて137円台前半まで下落した。その後は米株や米長期金利上昇に伴うドル買いが優勢となる展開に、138円台を回復した。20日、ドル/円は仲値にかけて5・10日要因から実需のドル買いが強まり上値を伸ばした後、翌日にECB政策理事会など重要イベントを控えたポジション調整の動きから137円台後半まで反落。ただ、海外時間においても狭いレンジ推移となり方向感に欠ける展開となった。21日、日銀金融政策決定会合にて現行の金融緩和維持と黒田日銀総裁によるハト派的な発言を背景に、日米金融政策の方向感の違いから円売りが強まり、ドル/円は一時週高値の138.88円まで上昇するも、その後発表の米7月フィラデルフィア連銀景況指数等、複数の米経済指標の冴えない結果に、一時137.30円まで急落した。22日、アジア時間朝方は前日のドル売りの流れからドル/円は137円ちょうど付近まで下落するも、前日のラガルドECB総裁の発言がハト派的との見方から、対ユーロでのドル買いがドル/円にも波及し、じりじりと反発。しかし米国時間に、米7月サービス業PMIが景気の分岐と言われる50を下回ったことでドル/円は週安値の135.58円まで下落後、136.08円で越週。

今週は27日(水)にFOMCを控える。米6月CPI発表後からタカ派的と見られるFed高官らから+75bp利上げを支持する発言がなされており、市場では+75bp利上げがメインシナリオとなっている。一方本邦においては先週の日銀金融政策決定会合で、現行の金融緩和を維持していくスタンスが明確化された。利上げがメインシナリオ通りであれば、日米金融政策の違いが強く意識されドル買い圧力が強まるだろう。一方で6月FOMCにおいて+50bp利上げがメインシナリオとなる中、結果は+75bpだったことを踏まえると、今回も+100bpsとなる可能性をリスクシナリオとして認識せざるを得ない。その他、26日(火)米7月コンファレンスボード消費者信頼感、27日(水)米6月耐久財受注、28日(木)米4~6月期GDP、米新規失業保険申請件数、29日(金)米7月ミシガン大学消費者信頼感指数、米6月個人支出の発表を控える。特に米4~6月期GDPの結果については、FRBによる急速な金融引き締めがどの程度米経済に影響を及ぼしたかが注目される。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/18~7/22)の値動き: 安値 135.58 円 高値 138.88 円 終値 136.08 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1) 今週の予想レンジ: 1.0050 ~ 1.0300 136.50 ~ 142.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は乱高下しながら上値切り上げた。週初18日、1.0097でオープンしたユーロ/ドルはアジア時間に一時週安値1.0080を付けた後、前週からのFRBの大幅利上げ観測後退を受けたドル売りに1.02ちょうど付近まで急伸。19日は欧州債利回り上昇に1.02台後半まで急上昇するも、その後米金利上昇によるドル買いに押され、1.02台前半まで下落。20日、翌日のECB政策理事会での利上げ期待を背景に1.02台後半まで上昇。海外時間ではユーロ圏7月消費者信頼感指数の冴えない結果やイタリア政局混迷が重しとなり、1.01台半ばまで急落。21日、ロシア・ドイツ間の天然ガス供給再開のヘッドラインを受け上昇する中で、ECB政策理事会での+50bp利上げを受けて一時週高値の1.0279まで上昇。但しラガルドECB総裁による最終的な金利水準は変えないとの発言を受け1.01台半ばまで下落。22日も上値重く推移する中、ユーロ圏7月PMI速報値が市場予想を下回る結果となりユーロ売りが加速。その後NY時間に米経済指標の冴えない結果にドル売りが強まりユーロが買い戻される場面があるも戻りは限定的、1.0214で越週。

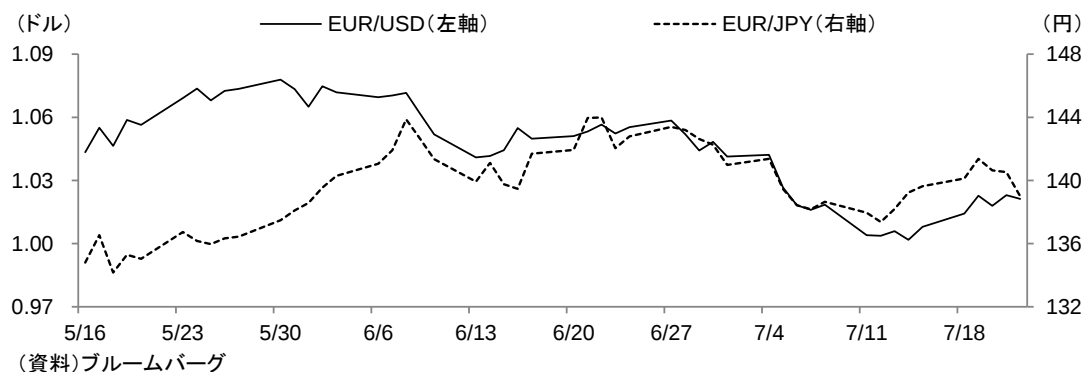
今週のユーロ相場は上値の重い展開を予想。先週注目されたECB政策理事会では当初市場予想を上る+50bpの利上げが発表されたものの、目下ユーロ圏のエネルギー供給不安や高止まりする物価上昇率の経済影響を考慮すれば今後の継続的な利上げを疑問視する向きも多い。ラガルドECB総裁は先週末、「物価上昇を抑制すべく必要なだけ利上げをする」と発言し、今後も利上げ継続姿勢を示したが、その副作用は南欧債中心に先行し、遠からずユーロ圏全体の景気減速懸念へ波及する可能性があろう。政局が不安定化するイタリアの長期金利は既に大幅上昇し、ドイツ国債利回りとのスプレッド拡大を招いている。先週のECB政策理事会では、政策金利の利上げと併せてユーロ圏国債市場の断片化を防ぐ債券購入プログラム(TPI)が発表された。資金調達環境の悪化するユーロ加盟国債券をECBが購入する枠組みだが、その適用条件のハードルは高く、一部の金利上昇国の救済には不十分との見方も多い。ウクライナからの穀物輸出が依然不安定であり、加えてロシアからの天然ガス供給不安も広がる中、欧州では記録的な猛暑となりエネルギー需給の逼迫は強まりインフレ鎮静化への道のりはなおも厳しい。先週発表されたユーロ圏7月製造業PMI速報値は市場予想を下回る49.6と節目50割れとなったことなどもセンチメント下押し材料。今週はFOMCを予定し、+75bpの大幅利上げに動くとの見方が大層であり、同様にリセッションリスクを抱えつつも利上げに邁進する米国を眺めつつ、短期的なドル強含みにユーロは上値の重い推移が想定されよう。その他経済指標として、29日(金)ユーロ圏7月消費者物価指数、ユーロ圏4～6月期GDP等を予定。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/18～7/22)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0080 高値 1.0279 終値 1.0214

(対円) 安値 138.79 高値 142.31 終値 138.92



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.1850 ~ 1.2050 162.00 ~ 166.50 円

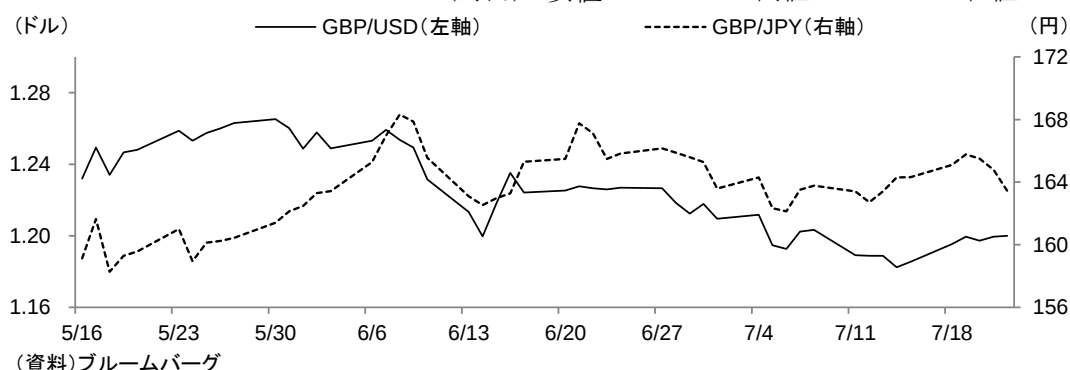
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルで堅調気味の横ばい、対ユーロでは軟調気味の横ばいを支配的とした。対円でも堅調気味の横ばいが先行したものの、週引けを前に明確に水準を切り下げた。主要通貨市場で先行したのはユーロの反発。この間、ウクライナを舞台とした戦争に加え、独貿易収支の31年ぶりの赤字転落、独燃料企業破綻(債務不履行)懸念、ロシアからの天然ガス供給(ノルドストリーム1経由)途絶など、ユーロに弱気になる要因には事欠かない状況が続いていたが、先週は、欧州中銀による大幅利上げ観測、実際的大幅利上げがユーロ反発を促す要因を供給した。対ドルでのポンド堅調も、大局的には、ユーロの反発に連れた値動きと言えた。18日のポンド上昇には、英中銀金融政策委員会ソーダース委員の「英中銀政策金利は(現行の1.25%から)2%以上に上昇する公算が高い」との発言が貢献したと考えられたものの、8月で退任する、同委員会タカ派最右翼のタカ派的発言に、ポンドの上昇は長続きしなかった。その後、19日には、同中銀ベイリー総裁が「8月の0.5%ポイント利上げの可能性を検討している」と述べ、20日には、発表された英6月CPIが市場予想を上振れたものの、いずれもポンドの反応は鈍かった。21日以降、通貨市場で顕著になったのは円の全面高。同日の日銀金融政策決定会合は現状維持を決定。長短円金利が現行水準にとどまること(ほぼ)確定的となったが、一方で(行き過ぎた金融引き締めによる)英を含む主要経済の長期金利低下が顕著になり、金利差縮小を背景に円全面高が進んだ。ポンドも、対円で明確に水準を切り下げた一方、対ドル、対ユーロでは堅調気味の値動きを見せて週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、軟調を予想。この間のポンドの値動きの大半が、ユーロへの連れ高、円全面高の余波であった経緯を振り返ると、目先の値動きも、ポンド固有の要因によるよりも、ドル側の要因、ユーロ側の要因、円側の要因に振られる可能性が高いのではないかと。ドル側の要因では、なんと言っても27日(水)の米連銀公開市場委員会の結果発表が注目される。ただし、現在までに最低でも+75bpの大幅利上げの織り込みが進んでおり、その限りであれば、通貨市場の反応も限定的となる可能性が高い。興味深いのはむしろユーロの方で、大幅利上げ観測を追い風に反発基調を確立し、実際に大幅利上げ(+50bp)が決定されたことで、決定発表直後こそ買い上げられたものの、その上昇は限定的、かつ一時的にとどまった。今般の大幅利上げは、想定される利上げの「前倒し」に過ぎず、今次利上げサイクルにおける最終的な利上げ幅の拡大を意味するものではないと示唆されたことがユーロの重石になった可能性は確かに考えられたものの、それ以上に、(必要以上に明示的な)フォワードガイダンスを唐突に取り止めたり、今般導入された資産購入策(TPI)の実施要項が極端に恣意的(なんでもあり)であることなどから生じる先行き不透明感が嫌気された可能性も考えられる。ユーロの先行きに下落リスクを見るのであれば、この間の値動きに鑑みて、ポンドも連れ安する可能性を中心に警戒することになろう。ポンド固有の要因では、9月まで続く保守党党首選の動向が気掛かり。現時点で、保守党党員投票ではトラス外相の優位が伝えられるが、同相は、代替財源のない減税(+増税取り止め)方針と合わせ、インフレ抑制のために「日本を見習うべき」などと主張しており、その経済政策運営手腕には大きな疑問符がつくと考え。25日を皮切りとした討論会や、今後の世論調査結果などを見守る必要があるが、大枠としては、スナク前財務相優位ならポンド堅調、トラス外相優位ならポンド軟調を基本シナリオとすることになるのではないかと。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/18~7/22)の値動き: (対ドル) 安値 1.1864 高値 1.2064 終値 1.2010
(対円) 安値 163.01 高値 166.25 終値 163.44



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6870 ~ 0.7020 93.40 ~ 94.90 円

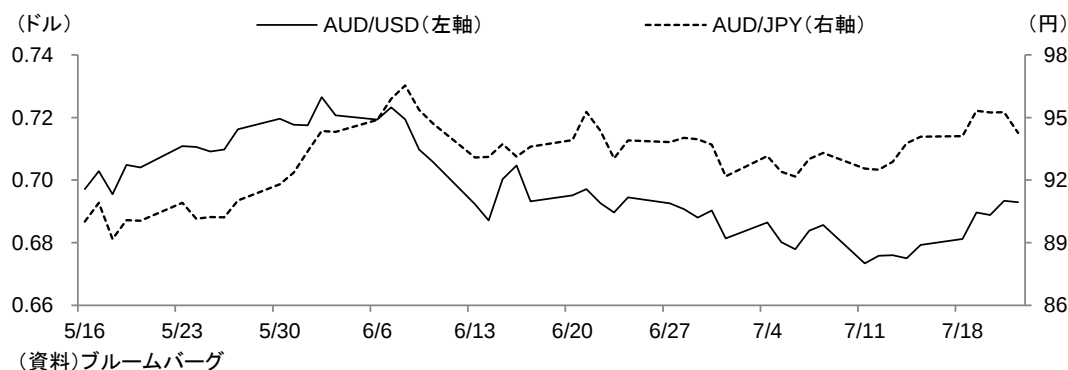
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.67台から0.69台まで上昇。18日、予想を上回るNZ4~6月期CPIの結果を受けて、NZDが買いで反応し、豪ドルも連れ高。前週金曜日に発表された米7月ミシガン大学消費者信頼感指数の結果を受け、次回FOMCでの+100bp利上げ期待が後退し、ドル売り優勢の流れが継続したことも、豪ドルを支え、0.68台半ばまで上昇。19日、RBA議事要旨がタカ派的な内容だったことを受けて買いで反応。また、ロシアがノードストリーム1を通じたガスの供給を再開するとの報道を背景に米株が上昇幅を拡大する動きに連れて、豪ドルも上値を追う展開となり一時0.69台を超えた。20日、イタリア政局混迷のヘッドラインが流れる中、米ドルに買いが膨らんだが、堅調な株価が豪ドルの下値を支え、終日レンジ推移。21日、ECB政策理事会では+50bp利上げを決定。豪ドルはECB前後で大きく振れた後、米7月フィラデルフィア連銀景況指数及び米新規失業保険申請件数が予想比弱い数字となったことを受けて米債に買いが膨らむと(米金利低下)、上値を追う展開に0.69台前半まで上昇。22日、米6月PMIサービス業が50を大きく下回ったことで、利上げペース加速との思惑が後退し、米債利回りが大きく低下すると、米ドルに売りが膨らみ、豪ドルは一時0.69台後半まで上昇。その後、米企業決算への失望から株価が大きく下落する中、豪ドルも頭を押さえられ0.69台前半で越週。

今週の豪ドルは底堅い値動きを予想する。27日(水)豪4~6月期CPI、FOMC、28日(木)豪6月小売売上高などが主な注目材料。FOMCに関しては、直近発表された米7月ミシガン大学期待インフレ率が前月よりも低下したことから、+100bp織り込みつつあった次回利上げ見通しが大きく後退している。一方、先週発表された7月RBA議事要旨では、RBAがこれまで2.5%付近とみなしていた中立金利に関して「議論した」ことが明らかとなった。これは、最終的な政策金利のレベルに関する議論の前提が変わる可能性を示唆しており(ターミナル・レートが想定以上に高い水準まで引き上げられる可能性)、市場にサプライズを与えた。27日(水)に発表される豪CPIでは更なるインフレ高進が示される可能性が高く、タカ派的な7月RBA理事会議事要旨、ロウRBA総裁発言と相まって、年内の利上げ観測を高め、豪ドル買いの動きを支える可能性がある。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/18~7/22)の値動き: (対ドル) 安値 0.6792 高値 0.6976 終値 0.6925
(対円) 安値 93.94 高値 95.76 終値 94.26



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。